

テクノセンター 感想文

神奈川大学 外国語学部中国語学科 渡辺健太

今年の8月16日から9月1たちまで私は中国の深センにあるテクノセンター（日技城）にインターンシップに行ってきました。

非常に貴重な体験だったので、そこに行くまでの経緯と感想を述べたいと思います。

テクノセンターを知るまで

初めに、テクノセンターとは自力で中国進出が難しい日本の中小企業の支援を目的とした会社であり、同時に日本からのインターンシップをもう何年も受け入れている会社です。

私がこの話を聞いたのはちょうど夏休み前の六月頃でした。授業中に教授がこんな経験をさせてくれるところもあるだよ、と紹介してくれたのが始まりでした。

私は中国語学科ということもあり、普通の観

光では決して触れることのできない、生の中国の労働現場を体験できるとあってすぐに教授に詳しい話を伺いました。

ちなみに神奈川大学が参加するのは今年が初めてなので、まったく情報が無い状態でした。

私は海外に行くのは初めてで、中国語が得意というわけでもありませんでした。しかし、ふあんよりも期待のほうが大きく何とかなるだろうと楽観視していました。

いざ中国に着いて一番最初に驚かされたのが香港の発展具合でした。特に空港ということもあり英語、中国語、広東語と多言語が使われており、日本では体感できない「国際化」を感じると同時に自分の言語能力の低さに絶望しました。

インターンシップといってもテクノセンター

のものは日本のものとは少し違います。

テクノセンターでのそれは、期間中のあらゆる行動が学生の自由に任せるといったものでした。

約二週間にわたるスケジュールをすべて自分で管理しなければならなかったのです。

最初にテクノセンター内のテナントの資料を渡され、あとは各々好きなようにアポイントをとったりヒアリングをさせてもらったりと、自分で自分のスケジュール管理をしなければなりませんでした。

ストライキ体験する

現地入りすると驚きの連続でした。

まず、最初に、ストライキについてです。これは現地に到着して1〜2日で発生しました。

私は別段「お客様」として来たわけではなかったけれど、日本ではまずお目にかかれない現象がいきなり起こり、しかもソレが原因でテナントの中に立ち入り禁止区域が出来てしまったりと、軽い緊張感が漂ったのを今でも覚えています。

またテナントの状況もばらばらでした。全てを中国人に任せ、現地化に成功しているテナントもあれば、着たばかりでマーケットがまだ確立していないテナントがあつたりと様々でした。

また現地の工場長、現場監督の考え方も非常に興味深かったです。ワーカーと会社側での摩擦を少なくするために、工場長の権限の大きさでその会社の本気具合を図ることができました。

マネジメントにいたっては日本人とは考え方の違う中国人とどう付き合っていくか、それぞれ権限内で行える創意工夫を行っており、どれも驚かされるものばかりでした。

私が特に驚かされたのがテクノセンターという一つの大きな枠組みの中にあっても各テナントはルールを厳粛に受け止めていないということでした。それは労働条件が違うワーカーたちの不満を減らすための工夫でもありました。

そしてその「工夫」の結果生ずる不満が結局問題を全体的に広めてしまうという一種のジレンマのサイクルが実際に体験できました。

テクノセンターでの出来事はどれも日本にいては体験できないものばかりで、今後自分がしなければならぬことを思い知らされる非常に有意義な時間でした。

私はこのインターンシップに二年次に参加できて本当によかったと思います。なぜなら三年ではなにかやりたいことが見つかつてても基本的に時間が残っていないためです。

一年では何をやらよいかわからず、三年では遅すぎると感じたため、この二年のときに貴重な体験をさせて頂いて本当になりました。